

狂言の動作单元 (一)

——和泉流小舞について

松 羽

本 田

雍 昶



## はじめに

周知のとおり、能の演技（部分演奏である舞囃子・仕舞も含めて）の動きを記した書物を型付けと呼ぶ。能の演技は一連の定型的な動きから成り立っていて、その動きは、たとえばハシカケVハヒラキVハシオリVといった固有の名称をもつ最小の単位に分けられている。一般に能の「型」というとき、これらの名称をもつ単位をさすことが多いが、一方で、「型」はより漠然と能の所作総体をさしたり、さらに広義には能の演出の謂に用いられることもある。

本稿では、そこで、ハシカケVハヒラキVなど最小の単位を動作单元とよぶ。もちろん、これは事新しい呼称ではなく、おそらくは横道萬里雄・増田正造共著『能と狂言』（昭和三四・大同書院）で使われて以来、たとえば『演劇百科大事典』の「能の型」の項でも「能の動作の单元。（中略）能ではすべての動作が单元、つまり型に分解される」とあるように使われている用語である。

室町末期以来、各流に各種の能の型付けがある。ことに近代は、仕舞・舞囃子の稽古用に懇切な型付けが公刊されているから、それによって、シテ方五流の型すなわち動作单元名を知ることができる。当然、流派ごとに単元の数量に隔たりがあり、分類の方法も異なり、同名異型、異名同型などもある。そこで、当研究所内の能楽技法研究会では、かつて横道萬里雄氏指導のもとに、各流の動作单元を網羅しつつ、新たな分類のもとに、統一名称をほどこし整理統合した『能の動作单元一覧』（仮称、以下『一覧』と略記）のプリントを作成した。本稿は、それに準拠して狂言の型についても同じ作業を試みようとするものである。

## 狂言小舞と狂言と

ところで、『一覧』に準拠するといっても狂言の型を能のそれと同じ方法で律することはできない。

能はいわゆる歌舞劇であり、その定型的な動きは仕舞の実技習得という現象を通して、早くから普遍的に認知されてきた。しかも仕舞はほとんどそのまま能の部分演技であり、たとえば、あらゆる演目の仕舞どころの動作単元を結集すればそれが能の動作単元の大部分を占める。ところが、狂言はいわゆる科白劇であり、しかも歌舞の要素を基底に持っているのも、動作単元も複雑である。前記『演劇百科大事典』「能の型」の項には「狂言には名称のない動作が多いが、これは能ほど類型化されていないためと、その演劇の本質の差異によるものである」と説かれている。たしかに狂言（本狂言）の演技は、能のようにすべての動作を単元に分解するためには、あまりに現実的・写実的である。にもかかわらず、類型化されていないわけではない。

能の仕舞に一見酷似した形態として、狂言には小舞がある。が、仕舞が常に能の一部であるのに対し、多くの小舞はそれ自体独立し完結した小品の舞踊曲であり、同時に、一番の小舞はしばしば複数の狂言演目に劇中演戯として採用、挿入される。だから、小舞の動作単元とは別に狂言（本狂言）の動作単元が存在する。たとえば、小舞には、能と同じハシオリVという単元がある。ところが、狂言（本狂言）になると、様式的なハシオリVのほかに、きわめて写実的なハ泣クV型が頻出する。ハ構エVひとつ取ってみても、小舞のそれは、抽象的・基本的なデッサンとしての姿勢だが、狂言（本狂言）では役割ごとに肘の張りぐあい、足の開きぐあいなどに差があり、ハ大名ノ構エVハ太郎冠者ノ構エVハ山伏ノ構エV……というべき単元が設定されうる。のみならず、同じ小舞にしても、小舞自体として紋服で舞う場合と狂言（本狂言）の劇中人物の演戯として舞う場合とは異なる。小舞「柴垣」を狂言「庵の梅」のシテ老尼が舞うときは、当然、老人らしいハ構エVとハ連ビVからすべての型が展開する。ハ連ビVについて言えば、小舞のハ連ビVとして本稿ではハ摺り足Vハ浮キVハ横足Vハ流レ足Vの四種を挙げたが、狂言（本狂言）になれば、祖父・尼などのハ年寄り足V、和泉流における鬼・山伏のハ上ゲ足V、猿・葎などのハ飛ビ足V、狐・狸のハケモノ足V、酔態のハ酔イ足V、牛・馬・犬などのハ這イ足V等々を付加することになろう。私どもは狂言（本狂言）についても、そのように



可及的に動作単位を設定し命名したいと考えているが、今はまず、小舞に限定することにした。右に見たように小舞即狂言ではないにもかかわらず、狂言の演技は、名称のない写実的な動作を基本とするのではなく、体の動きが小舞を（発声は小舞謡を）基本に形成されているからである。

### 参考資料と作業の方針

従来、狂言小舞の動作単位についてある程度まで体系的に解説した書物に、つぎの三本がある。まず、野村万蔵著『狂言の道』は小舞附囃子の章を設け、そのなかの「舞の型」の項で二二一の動作単元名を挙げている。小舞に限定しているので分りやすく便利だが、曲例は示されていない。つぎに、安藤常次郎・古川久・三宅藤九郎・小林責共著『狂言総覧』は「狂言演出用語解説」の項を設けているが、掲げられた動作単元名は三八項目と、少ない。そして、古川久・小林責・荻原達子共著『狂言辞典事項編』は最も多く、二二七の動作単元名が立項されている。解説、曲例の挙げ方等きわめて精密だが、小項目、五十音順の事典という性格上、動作単元名のみを体系的に見わたすわけにゆかないのはやむをえない。

明治以後に公刊された型付けは、野村萬斎編『狂言正本』別巻（以下『正本』と記す）と和泉保之編『改訂小舞謡』（以下『小舞謡』と記す）とで、ともに和泉流現行小舞謡と小舞の稽古用テキストである。大蔵流には同種の公刊テキストがない。

なお、江戸期の型付けで公刊されているのは、山脇和泉家の台本と演出を伝える古典文庫『和泉流狂言集』全二〇冊で、第二〇冊には二三番におよぶ小舞の詞章と型付けが記されるほか、一〜一九冊所収の各狂言中にも小舞が舞われるときは、そのつど詞章と型付けが記されている。

今回は、右に挙げた書目を参考としながら、和泉流の『正本』と『小舞謡』のほかに、大蔵流の型付けとして山本東

次郎氏所蔵の『虎寛筆小舞型付』（仮称）と『三世東次郎筆小舞型付』（仮称）とを同氏の御好意で借覧することができたので、その四本所収の小舞を対象に、すべての動作单元名および单元名に相当する動きを示した記述を一々カード化した上で、『能の動作单元一覧』に準拠して、分類、体系化を試みた。その際、筆者（羽田・松本）の判断で、同一または類似の型と思われる別々の記述に対し統一名称または新名称を与えたものもある。

## 例言

一、以下に掲げるのは、『正本』と『小舞謡』に見られる和泉流狂言小舞の動作单元名を一覧したものである。

一、対象を右の二本に絞ったのは、収録曲目数が多く（『正本』は五二番、『小舞謡』は七一番、二本共有曲は四一番）、事実上、現行和泉流の演出の全容を伝え、单元名を及ぶかぎり多く摘出することができると考えたからである。

一、IⅦの大分類、AⅡUの小分類に分け、小分類のなかで番号順に单元名（延べ一八五種）を掲げ、動きの概要を記し、文末に曲例を示した。

一、分類法は『一覧』に準拠したが、狂言の特殊性を考慮して、M、頭部ノ動き、Q、扇ヲ用イル型、R、特殊ナ型などの分類を試みた。たとえば、扇を用いるのはQにかぎらないのだが、狂言独自の表意的具象的な所作と思われるもので单元名に「扇」の字が用いられているものを仮に一括してみた。Rとの区分は必ずしも明確ではない。

一、動きの概要を記すに際しては、『狂言辞典事項編』と『狂言の道』の説明文に大幅に依拠したが、部分的には筆者の所見に拠った。

一、曲例の掲出は二、三例内にとどめて一〇例以上あるものは二例のみ挙げて「……など多数」とした。

一、小舞謡の曲名は、小林責「現行小舞謡一覧」（綜合新訂版『能楽全書』第六巻）に拠った。そのため、本稿は和泉流小舞を対象としながら大蔵流の曲名で記す結果になったものがある（「風車」でなく「幼けしたるもの」とした例など）が、

続稿に大藏流小舞を対象とする作業を予定しているので、全体を通しての統一表記をはかったものである。

一、文中の動作単元名は△ ∨で、小舞の曲名は「」で示した。

一、この作業を通して、能の動作単元との異同比較——たとえば能と共有する型・狂言専有の型、その分布と用法、能出自の小舞の型付けの特徴——、『正本』から『小舞謡』へかけての変遷と異同——たとえば動作単元名の整理・統合・術語化が顕著なこと、実際の型付けが変遷している場合もあることなど——について、ある程度まで所見を得たが、それらは大藏流の単元名一覧を作成して後の続稿に譲りたい。

一、なお、本稿は昭和五四・五五年度科学研究費補助金による成果の一部であり、資料の整理、カード化の作業には、近藤敬子氏の御助力を得た。

## 動作単元一覧

### I、構エ

#### A、構エ

##### 1、常ノ構エ

軽く膝をまげて重心を低くし、腰を伸ばして胸を張り、あごを引く。両腕は外側へ張り、指をにぎる。単に△構エ∨という。能・狂言が共用する基本姿勢。

##### 2、半身ノ構エ

右または左の足を引き、半身になる。顔は正面を向いたまま。表記されることが多い。

##### 3、腰入レル構エ

△常ノ構エ∨から腰を落とし、上体を少しかがめる。△腰入レ∨△中腰∨などと記す。

## 4、下ニ居ル構エ

右膝を床につけて腰を落とし、左の膝を立てる。△片膝▽△膝ツキ▽などと記す。

## 5、安座ノ構エ

あぐらに似た姿勢。足を前で交叉させて組む。「鶉舞」には安座して後方に両手をつく特殊な型がある。

## B、運ビ

## 1、摺リ足（すりあし）

足を摺って出し、爪先や踵をなるべく浮かさないように歩く。能・狂言が共用する基本動作。

## 2、浮キ

体を浮かすように、両足を交互に上げて前へ進む。『正本』は△ヒオリ▽と記す。「七つに成子」「石河藤五郎」など。

## 3、横 足（よこあし）

左右いずれかの足を出し、それにもう一方の足をまたがせる動作をくり返して進む。『正本』は△チガへ足▽と記す。「景清」など。

## 4、流レ足（ながれあし）

両足爪先立って、小きざみに横に弧を描くように進む。「鮒」など。

## C、扇ノ持チ方

## 1、閉ジ扇

## a、常持チ

要を掌ににぎりこみ、要もとを小指でしっかりとおさえる。

b、中持チ

地紙の中央辺を小指の方へ要がくるようににぎる。

c、腰ニサス

要を下にして腰にさす。

2、開キ扇

a、常持チ

要もとを薬指でおさえ、親指を外側に出してにぎる。

b、カザシ持チ

指を伸ばし、親指の股に親骨をはさんで親指でおさえ、扇を立てるように持つ。△カザシ扇Vとも。

c、逆持チ

扇を横から平らに胸の前に出し、左掌に受けて両手で持ち、一度下げて扇を返し、要を逆手に持つ。△逆扇

(さかさおうぎ)Vとも。

d、カイ込ミ持チ

左手で親骨の地紙部分をにぎり、腕の内側へかかえこむようにする。

e、ツマミ持チ

要を親指と他の指とでつまむようにして持つ。

f、半開キ持チ

扇を半開きにして持つ。ただし、この形で静止していることはない。

## II、体位ノ移動

## D、向キ

## 1、向ク

体全体を一定の方向へ向ける。「海道下り」「酒の舞」など多数。

## 2、直ル（なおる）

別方向を向いていた体をもとへ向け直す。△正へ直ル▽△正へ向ク▽とも。「海道下り」「貝尽し」など多数。

## 3、開キ（ひらき）

足をひねって体をひらき（半身となり）、右または左を向く。△右開キ▽△左開キ▽などと記す。「柳の下」「七つに成子」など多数。

## E、進退

## 1、出ル

前へ進み出る。△二、三足出▽のように短い距離の場合と正先へ出るとき以外は、△ワキ座へ行▽△大小前へ行▽のように△行ク▽と記す。「七つに成子」「鐘の音」など多数。

## 2、一足出（いっそくで）

左・右と前方へ出て両足をつめる。文意を強調する場合が多い。「酒の舞」「七つに成子」など。

## 3、浮キ歩キ（うきあるき）

△浮キ▽ながらある地点まで行く。「海老すくひ」「御田」など。

## 4、這出（はいだし）

四つ言いになって前へ出る。「幼けしたるもの」「忍ぶ其夜」など。

## 5、下ル（さがる）

前を向いたままで後方へ下がる。△後下リ(うしろさがり)▽と記すことが多い。「暁の明星」「酒の舞」など多数。

# 6、引ク(ひく)

前を向いたままで後方へ足を一、二歩引く。△一足引▽とも。「暁の明星」「芦刈」など多数。

# 7、ソムキ下リ

首と手を交互に横にふって「いやいや」のしぐさをしながら、後ずさりする。「日吉は山王」「鉄輪」など。

# 8、二段下リ

角から正中、正中から常座へと、くの字型に後ずさりする。「八島」「鉄輪」など。

# 9、酔足(えいあし)

よろよろと後ずさりする。「日吉は山王」など。

# 10、回ル

舞台を一回りする。△左回り▽(『正本』は△順回り▽と記す)と△右回り▽(同じく△逆回り▽と記す)との両様がある。「よしの葉」「七つに成子」など多数。

# 11、大回り(おおまわり)

舞台を大きく一回りする。『正本』にのみ見え、『小舞謡』は単に△回ル▽と記す。

# 12、小回り(こまわり)

舞台を内輪に小さく一回りする。△左小回り▽△右小回り▽の二種がある。「小鼓」「名取川」など。

# 13、サシ回り

△サシ回シ▽の型をして舞台を一回りする。「酒の舞」「水車」など多数。

14、押シ回り

△押出シVの型をして舞台を回る。「府中」「幼けしたるもの」など。

15、浮キ回り

△浮キVながら舞台を回る。「御田」。

16、三角回り

正中から目付柱、目付柱から脇柱、脇柱から正中と、舞台上に三角形を描くように回る。「御田」。

## F、回転

1、急回り

片足を軸にして、くるとすばやく回る。△左急回りV△右急回りVの二種がある。『正本』はハクルリと小回りVと記す。「芦刈」「幼けしたるもの」など多数。

2、ソリ返リ

右足を左足にまたがせ、体をねじりながらくると一回転する。△肩杖Vを伴うことが多い。「水車」「鉄輪」など。

3、回り返シ

△急回りVの直後に反対方向へすばやく回り返す。能の△回り返シVとは異なる。「蟬」など。

4、飛ビ回り

片足を上げて飛びながら回る。能の△飛ビ回りVとは異なる。「御田」など。

## G、跳躍

1、一足飛ビ(いっそくとび)



両足をそろえて前方へ飛び上がる。単に△飛▽と記す。「幼けしたるもの」「兎」など。

2、飛び下り（とびさがり）

両足をそろえ、後方へ飛ぶ。△後飛▽△飛退▽などと記す。「幼けしたるもの」など。

3、飛び込ミ

左・右と足を上げて飛ぶ。『小舞謡』は別に△飛抜足▽を立てる。「幼けしたるもの」など。

4、片足飛び

片足を後方へ上げて飛ぶ。ちんちんもががのこと。本来は片足での△浮キ▽のこと。「御田」。

5、三角飛び

左・右・後方と、三角形を描くように飛ぶ。「瓢箪」など。

6、両手飛び

両手を高く上げて飛ぶ。「宇治の晒」など。

H、姿勢ノ急変

1、飛び返り

片足を軸に飛んで一回転し、片膝をつく。能の△飛▽返り▽に同じ。「幼けしたるもの」「田村」など。

2、ガッシ

飛び上がった片膝をつく。ついた膝と反対の手が前へ出る。能の△ガッシ▽とは異なる。『正本』にのみ見え、『小舞謡』は△安座▽と記す。「海人」「景清」など。

3、立飛び返り（たちとびかえり）

立ったまま△飛▽返り▽をする。「津の国」。

## Ⅲ、基礎ノ单元

## Ⅰ、基礎ノ单元

## 1、サシ

△常ノ構エVで、片腕を横から胸の前・肩の高さにさし出し、同時に、足を前に出して、そろえずに右足が半歩前に出る。「暁の明星」「桜川」など多数。

## 2、サシ開キ

扇を開いて、大きく横から前に出し、同時に右足をねじって左・右と出、扇で顔をなでるようにゆっくり右へ開き、同時に左足をねじって体も右へ向く。なお、上方や下方にサス場合、左へ向かず正面にサシて右に開く場合もある。「幼けしたるもの」「通円」など多数。

## 3、サシ分け

左掌を開き、外側から顔の前へ出し、右足をねじりながら左腕を大きく左へ開き、つぎに左腕をおろしながら、扇を持った右腕を横から大きく前に出す。足をつかう場合もある。「海人」「住吉」など多数。

## 4、サシ回シ

△常ノ構エVで、右腕を横から頭上へ出し、顔の前をなでるように、前方・扇の高さにさし出す。同時に、右足をねじり、左に向いて左・右と足を引き、両足そろえたと、左足から出て目付柱をさして行く。△角トリV△急回りVなどに続くことが多い。「雪山」「弱法師」など多数。

## 5、巻サシ（まきざし）

△常ノ構エVで、右腕を横から正面へ半円を描くように出し、胸の前で内側へ汲み上げるように前へ出し、扇を平らに、目の高さまで前へ出す。巻き上げるときに足を左に出し、前へさし出すときに足を右に出し、そろ

えず、右足が半歩前に出る。扇を前へ出すときの高さは、基本は胸の前。場合により上へも下へも。△汲ソデサス▽とも。能の△胸ザシ▽△打込ミ▽△クリ込ザシ▽△巻サシ▽と同類。「柳の下」「柴垣」など多数。

6、角トリ(すみとり)

目付柱へ向かって行き、止まって正面へ向く。△サシ回シ▽の後、△左回り▽の前に多い。能の△角トリ▽に類似。「よしの葉」「若松」など多数。

7、左 右(さゆう)

左斜めに体を向けて左腕を胸の前へさし、左足を一足出し、右足を引きつけ、つぎに右斜めに体を向けて右腕を胸の前へさし、右足を一足出し、左足を引きつけ、正面へ直って左右と下がり、扇を前方でくみ上げておろす。能の△左右▽に同じ。「泰山府君」「小鼓」など多数。

8、大左右(おおざゆう)

△左右▽の最初の動作のとき、扇をすくうように扱う。△スクイ左右▽とも。能の△大左右▽とはやや異なる。「鵜飼」「桜川」など。

9、片左右(かたざゆう)

△左右▽の前半の動きを省き、左・右と引きながら、右脇で扇を巻いて納める。「岩飛」「御田」など。

10、平左右(ひらざゆう)

左掌を開いて△左右▽をする。「七つに成子」など。

11、ユウケン

多くは右半身の構えで、開キ扇を持った右腕を肩の高さに上げ、横から顔の前にかけて扇の先で半円を描くように上下させる。祝福・歓喜などの意を表わす。能の△ユウケン▽に同じ。「福の神」「鮎」など多数。

## IV、下半身二関スル单元

## J、下居ノ動キ

## 1、片 膝（かたひざ）

右膝を床について△下ニ居ル構エ▽になる。△膝ツキ▽とも。「海人」「景清」など多数。

## 2、膝立テ替エ

△下ニ居ル構エ▽から、膝を立て替える。「海人」「名取川」など。

## 3、膝 行（しっこう）

交互に△膝立テ替エ▽ながら前へ出る。「海老すくひ」など。

## 4、片膝礼（かたひざれい）

△片膝▽のまま手を床につけ、頭を下げて礼をする。両手をつく場合と、開キ扇を左に取り前へさし出す場合とがある。△礼▽△礼拝▽とも。「雪山」「菊の舞」など。

## 5、合掌拝（がっしょうはい）

開キ扇の前に置き、片膝（または正座）して△合掌▽したまま上半身をかがめて礼をする。神仏を拝む意。『正本』に△膝ツキ扇下ニ置キ▽と記す。「住吉」「薬師」など。

## 6、平 伏（へいふく）

扇を床に置き、両手について礼をする。「鮎」など。

## 7、膝回り（ひざまわり）

△片膝▽のまま一回転して安座する。『小舞謡』は少し腰を浮かすのを△腰回り▽として区別する。「海人」「楽阿弥」など。

K、足ノ動キ

1、抜キ足

左右のものを交互に上げて、前後左右へ出る。単にハ抜キVとも。「兎」「海老救川」など。

2、跳ネ足

両足を片方ずつ前へ蹴上げる。「水車」「鮒」など。

3、伸ビ立ッ

両足爪先立って伸び上がる。『正本』はハ伸上ルVと記す。「梅の舞」「名取川」など多数。

L、足拍子

1、一ツ拍子

「七つに成子」「日吉は山王」など多数。

2、踏込ミ拍子

右・左、または左・右と、踵を上げて出、二足目で拍子を踏む。「景清」「八島」など多数。

3、二ツ拍子

トントンと踏む。「府中」「七つに成子」など多数。

4、三ツ拍子

トコトンと踏む。「柳の下」「よしの葉」など多数。

5、四ツ拍子

トントントントンと踏む。「府中」「七つに成子」など。

6、五ツ拍子

トントントントンなどと踏む。「よしの葉」「田村」など。

7、六ツ拍子

トン・トン・トントントンなどと踏む。「柳の下」「府中」など多数。

8、七ツ拍子

トコトントントントンなどと踏む。「津の国」「鐘の音」など。

9、八ツ拍子

トコトントントントントンなどと踏む。「八島」「鶉飼」など多数。

10、九ツ拍子

トコトントントントントントンなどと踏む。「名取川」「景清」など。

11、キザミ十拍子

トコトントコトントントントントンなどと、間をおかずに踏みつづける。「通円」など。

V上半身二関スル單元

M、頭部ノ動キ

1、首振り（くびふり）

首を左右に振る。△頭振り（かしらふり）▽とも。「野老」「蛸」など。

2、面切ル（おもてきる）

左・右いずれかへ顔を強く振り向ける。

3、見回（みまわし）

左・右、あるいは斜め下と、あたりを見回す。「田村」「海人」など。

## 4、見ル

文意に即して、上、下、左、右、手、掌、袖、腰、扇などを見たり、また、後方を振り返り見たり、仕手柱、目付柱、脇柱、笛柱、大小前、幕などの方向を見る。曲例きわめて多数。

## N、手ノ動キ

## 1、上ゲ

前に出した扇を上へ上げる。開キ扇と閉ジ扇と両様ある。「鶉飼」「鉄輪」など。

## 2、打合せ（うちあわせ）

両手を内側から一度開いて、前で強く打ち合わせる。そのとき、左手の甲に扇の地紙を重ねる。驚嘆、発見などの意を表わす。足拍子に続くことが多い。能の△打合せ▽に同じ。「鶉飼」「弱法師」など多数。

## 3、平打（ひらうち）

扇を開いて頭上で扇を返して、前方で打つようにしてきめる。足は一足つめる。△左右▽の納めなどに用いる。「土車」「海人」など。

## 4、合掌（がっしょう）

指を伸ばし、両手を顔の前で合せ、中指と薬指をつき合わせる。立ってする場合と、片膝ついてする場合とがある。「福の神」「海人」など。

## 5、押出シ（おしだし）

左手の甲を内側にして、扇を持った右手を胸の前で組み合わせ、前方へ押し出すようにして左右へひろげる。「宇治の晒」「七つに成子」など。

## 6、カイグリ

両手を胸の前で交互にぐるぐる回す。「海人」「蟬」など。

7、カイ込（かいこみ）

両手を横から胸の前に出し、左手を内側にして抱き合せる。「暁の明星」「大原木」など多数。

8、組合（くみあわせ）

扇を持つて両腕を胸の前で交叉させ、右腕を左袖の下へさしこんでかかえるようにする。「八島」など。

9、両合（りょうあわせ）

両腕を平らに前へ出し、手先を合せる。扇を持った形での合掌。「景清」など。

10、立寝（たちね）

扇を左手にかい込んで肩の高さまで上げ、かかえこむように顔をおおい、体をかめる。「よしの葉」「海道下り」など。

11、カキ分ケ

両手（左手が内側、開キ扇を持った右手が前面）を胸の前で合わせるハカキ合セVから、前方へ両手を広げる。「海人」「鮒」など。

12、肩杖（かたづえ）

掌を内側にして両肘をはり、指先を首筋に向けて両手を肩の上に上げる。「津の国」など。

13、払合（はらいあわせ）

前で抱き合せるようにした扇をはねるように外へ強く開く。「海老すくひ」。

14、両手拡ゲ（りょうてひろげ）

手を開いて両腕を横へ出しひろげる。「景清」「鶉舞」など多数。



## 15、 掴 ミ (つかみ)

左右いずれかの手を前へ出し、物をつかむようににぎる。「御田」「景清」など。

## 16、 カザシ

腕を伸ばして頭上にかざす。開キ扇を持つ場合と素手の場合とある。開キ扇の場合はほとんど角トリに続くので、とくに表記しないこともある。「芦刈」「野老」など多数。

## 17、 招 キ (まねき)

## a、 片招キ (かたまねき)

片腕を肩の辺まで上げ、手招きするように前方へ出す。扇を持つ場合(掌、内側)と持たない場合(掌、外側)とある。「宇治の晒」「番匠屋」など。

## b、 両招キ (りょうまねき)

両腕で招く。右手には常に扇を持つ。「道明寺」など。

## 18、 後サシ (うしろさし)

扇を持った右手を高く上げ、後方へ倒す。開キ扇と閉ジ扇と両様ある。「兎」「景清」など。

## 19、 シオリ

掌を開き、指をそろえ、眼をおおうように高く上げて、心持ちうつむく。悲しみ、泣くしぐさを表わす。能のハシオリに類似。通常は片手を用いるが、両手でシオルことをハ双シオリ(もろじおり) ヲハ両シオリなどという。「鶉飼」「海人」など。

## 20、 腕マクリ

指を伸ばした掌で袖をまくるように腕をなで上げる。ハ両腕マクリもある。「景清」「春雨」など。

21、掌キメ（てのひらきめ）

左掌を開き、返して前方に向けて伸ばし、体を右へ引き、掌を顔の前でキメる。「景清」など。

22、ツマミ合

右手に持った扇をつまんで外にはね、左手とともに胸の前で合せる。「番匠屋」「小鼓」など。

23、ナビカシ

左右いずれかの手を横へ振る。一つ振る場合と二つ振る場合、ふつうに振る場合と大きく振る場合、扇を持って振る場合と扇を持たずに掌を広げて振る場合とがある。大きく振る場合をとくに「大ナビカシ」という。

「家土産」「景清」など多数。

24、打込（うちこみ）

扇または杖をふり上げて前方へ強く打つ。「津の国」「番匠屋」など。

25、膝打（ひざうち）

左右いずれかの手で膝を打つ。「海老救川」「祐善」など。

26、掌俯ケ（てのひらうつむけ）

ハサシVた左手を大きく返し、ふせて、前から左へ流す。「細布」など。

27、左手受（ひだりてうけ）

左掌を上にして前へ出す。物を手に受ける意。「春雨」「番匠屋」など。

28、左手、胸に当（ひだりて、むねにあて）

文意に即して、左掌で胸をおさえるように当てる。「名取川」「海人」など。

29、指サシ（ゆびさし）

30、扇指サシ（おうぎゆびさし）  
 半身に構え、腕を大きく動かし、左右いずれかの人さし指で顔をさす。「柳の下」「福の神」など多数。

31、指折（ゆびおり）  
 開キ扇を左手に持ち、右手人さし指で扇の真中をさす。「雪山」「海老救川」など。

腕を前へ出し、一本ずつ指折り数える。「道明寺」「鶉舞」など。

# O、袖ノ動作

1、袖打ち（そでうち）

左袖口を持つて前へ出し、その左手を扇で打つ。「海道下り」「春雨」など。

2、袖屏風（そでびょうぶ）

左袖口を持ち、顔の前に上げて顔を隠すようにする。「景清」「塗師平六」など。

3、袖払ウ（そではらう）

上げた左袖を強く払いおろす。「威陽宮」など。

# P、上体中心ノ動き

1、立礼（たちれい）

ハ常ノ構エVで、膝を少し落として礼をする。「河水」など。

2、透見（すきみ）

開キ扇を右横から顔の前へ立てて出し、一度腰をかがめてから爪先で伸び上がり、扇の骨のあいだから向こうを見る。「七つに成子」「小山伏」など。

3、聞ク

耳をすまして何かに聴き入るように、左右いずれかへ体を少し傾ける。ハクモリVより写實的。「景清」など。

#### 4、クモリ

上体をかがめて少しうつむく。ハ聞クVより抽象的で広範囲に用いられる。「柳の下」「鐘の音」「鉄輪」など。

#### 5、キメ

左足を踏み出し、半身になって、面ヲキルこと。文意を強調することが多い。「海人」「鉄輪」など。

### Q、扇ヲ用イル型

#### 1、上ゲ扇

開き扇を左に取って下げ、すくうように前へ水平に出す。『正本』はハ扇左ニトリ返シテサシ上ゲVなどと記す。能のハ上ゲ扇Vとは異なる。「芦刈」「松の舞」など。

#### 2、合セ扇（あわせおうぎ）

開き扇を返しながら頭上に持ってゆき、地紙に左手を添える。「名取川」「海人」など。

#### 3、受ケ扇（うけおうぎ）

左・右と出ながら開き扇を平らに前へ出し、地紙に左手添えて上げる。能のハ杯ノ扇Vに似る。「貝尽し」「名取川」など多数。

#### 4、後扇（うしろおうぎ）

扇をハ逆持チVのまま腕を返し、子供を背負う形をする。「よしの葉」「山崎通ひ」など。

#### 5、押エ扇（おさえおうぎ）

閉じた扇を左掌でおさえる。「兎」など。

## 6、返シ扇

左手で開キ扇の地紙を持ち、前へ平らに出してから内側へ折り返す。「雪山」「海老救川」など。

## 7、鏡ノ扇

開キ扇を横から大きく顔の前に立てて出し、つぎに下がりながら扇を上げて元の構エになる。『正本』はハ鏡ニ見、上ゲVと記す。能のハ上ゲ扇Vと動きは同じだが、能のように抽象的な型ではなく、鏡に映し見るという表意的な型。「柳の下」「七つに成子」など多数。

## 8、隠レ扇

開キ扇を顔の前に上げて、顔を隠す。「鶉飼」など。

## 9、笠ノ扇

開キ扇に両手ふせてかけ、頭上に掲げる。『正本』はハ扇上へ上ゲVハ両手カザシVなどと記す。『小舞謡』は類似の単元ハ雨ノ扇Vを別に立てる。「柳の下」など。

## 10、キメ扇

開キ扇を打ち定めてキメる。「番匠屋」「七つに成子」など。

## 11、扇捨テル

ハ平打Vのように開キ扇を投げ捨てる。「海人」「山崎通ひ」など。

## 12、扇振回シ

閉シ扇を前方で回しながら、振る。松明の意。「鶉飼」など。

## 13、酌ノ扇

開キ扇を横から前へ立てて、前に出した左手の上へのせ、上へ引き上げる。「よしの葉」など。

14、袖ナデル

扇、エブリなどで左袖を二度なでる。「蛸」「野老」。

15、袖ノ扇

左袖を前へ出し、開キ扇で受ける。「泰山府君」「雪山」など。

16、立 扇（たておうぎ）

開キ扇を右肩の上に立てて上げる。「山崎通ひ」「鐘の音」など。

17、月ノ扇

開キ扇を平らに左肩に当て、右足を左足にかけ、右上を仰ぎ見る。月を見る意。『正本』は△月見ノ型▽と記す。「よしの葉」「七つに成子」など。

18、花ノ扇

開キ扇と左手を胸の前で重ね、左・右と足を引きながら両腕をひろげ、遠くを見る。能の△雲ノ扇▽に似る。

『正本』は△花見ノ型▽と記す。「七つに成子」「海道下り」など。

19、ハネ扇

開キ扇を左に持ち、右肩から左へはねる。△扇ナビカシ▽△風扇▽とも。能の△ハネ扇▽にはほ同じ。「梅の舞」「山崎通ひ」など。

20、額 扇（ひたいおうぎ）

扇の要を持ち、地紙の端を額の辺にかざす。開キ扇・閉ジ扇両用。「七つに成子」「海人」など。

21、揉ミ扇（もみおうぎ）

閉ジ扇を縦に前に出し、両手にはさんで揉む。『正本』は△扇ヲ両手デ揉ム▽と記す。「幼けしたるもの」「番

匠屋」など。

22、両 扇 (りょうおうぎ)

開キ扇を平らに前へ出し、両手を上からかぶせるように地紙を持つ。△双扇▽とも。△笠ノ扇▽に続くことが多い。「柳の下」など。

23、枕ノ扇

開キ扇を左に取り、腕を上げて顔を伏せる。『小舞謡』は△カイ込、クモリ▽と記す。「八島」「道明寺」など。

VI、特殊ナ型

R、特殊ナ型

1、煽グ型 (あおぐかた)

開キ扇を左右に動かして火をおこす所作。「通円」。

2、糸引ク型

閉ジ扇を左に持ち、つまんだ形の右手に要を当てて左へ引く。墨さしを使う所作。「番匠屋」。

3、契印ノ型 (けいいんのかた)

左の親指と人さし指で輪をつくり、胸の前に出す。△左ユビ輪ニカマヘ▽と記す。「祐善」。

4、白挽ノ型

閉ジ扇を中持ちし、石臼を挽くように胸の前で静かに回す所作。「薬師」。

5、貝吹ノ型

△逆扇▽の要を口に当て、法螺貝を吹く所作。「貝尽し」。

6、鐘ツク型

閉ジ扇の先を左手でにぎり、要を前にして右肩へ上げ、右手添えて前方へくり出す。『正本』は△扇半開キ▽と記す。「道明寺」。

7、髪ツカム型

左手前に出し一つ巻いて髪をつかむ。△巻込▽△手ニ巻ク形▽と記す。「鉄輪」。

8、汲入ル型

開キ扇を下をすくい、水や湯を汲み入れる所作。△汲ミ▽△汲ミ上ゲ▽とも。「菊の舞」「通円」など。

9、尺八吹ク型

閉ジ扇を両手で持ち、要を下にして顔の前に構える。「楽阿弥」。

10、剃ル型

右手の扇で頭の後ろから前へ、髪を剃り落とす所作。「蟬」。

11、太刀ヌク型

閉ジ扇を左手に取り、要を前にして左腰に当て、右手をかけて抜く。△ソリ打（そりうち）▽と記す。「暁の明星」。

12、鼓打ツ型

閉ジ扇を左中持ちして右肩へ上げ、右手で地紙を打つ。『小舞謡』は△鼓扇、打▽と記す。「小鼓」「道明寺」。

13、点茶ノ型

左掌を胸の前に構えて茶碗に見立て、閉ジ扇の要の方で茶をたてるしぐさをする所作。「通円」。

14、脱グ型

右手で左肩を、左手で右肩をなでて衣を脱ぎとる所作。「鮒」「通円」。

15、呑ム型



△受ケ扇▽を杯にし、手前に口を寄せて呑む所作。「酒の舞」「福の神」など。

# 16、庖丁ノ型

左手に閉ジ扇を逆に持って箸とし、右手の扇を庖丁にして料理する所作。「河水」。

# 17、堀ル型

エブリまたは杖を両手で持ち、土を堀りおこす所作。「野老」。

# 18、鞆ツク型

閉ジ扇を右に持ち、両手で交互に鞆をつく所作。△鞆ノ型▽とも。「幼けしたるもの」。

# 19、耳ノ型

両手ともに人さし指と中指を伸ばし、耳の上に出す。△ユビ二本出シ▽と記す。「兎」。

# 20、胸切ル型

逆扇の地紙で胸の辺を引き回し、切る所作。△扇引回▽と記す。「海人」。

# 21、槍シゴク型

杖を両手に持ち、しごく所作。単に△シゴク▽と記す。「忍ぶ其夜」。

# 22、揺ル型（ゆするかた）

両手を前へ出し、樹木を揺する所作。『小舞謡』は△ユスリ▽と記す。「道明寺」。

# 23、弓引ク型

閉ジ扇を左中持ちし、顔の前で両手合せて左右へ分けて引きしぼる。△弓ノ型▽△弓射ル型▽などと記す。

「幼けしたるもの」「鶉舞」など。

# 24、櫓ヲ押ス型

開キ扇に左手を添え、胸と左膝がしらのあいだを往復させる。『小舞謡』は八櫓ノ型Vと記す。「宇治の晒」  
「七つに成子」など。

# Ⅶ、道具ノ扱い

## S、杖ノ動作

- 1、左ニトル……………「忍ぶ其夜」
- 2、カタゲル……………「忍ぶ其夜」

## T、傘ノ動作

- 1、ヒラク……………「祐善」
- 2、スポメル……………「祐善」
- 3、両手ニ持ツ……………「祐善」
- 4、車回シ……………「祐善」
- 5、見上ゲル……………「祐善」

## U、エブリ(「野老」の場合は杖にても)

- 1、左ニトル……………「野老」
- 2、両手カケル……………「御田」
- 3、ソムキ振ル……………「御田」
- 4、打ツ……………「野老」
- 5、上ル……………「野老」